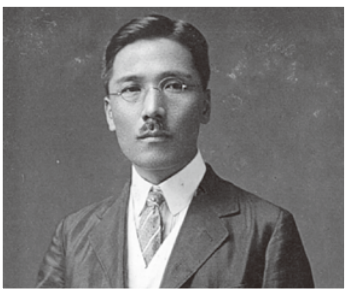
大学文書館へ行こう

第4回「二人のパイオニア」

北海道大学大学文書館　井上　高聡



中島九郎（1925年ころ）

大学文書館の仕事は大きく分けると、北海道大学の、①歴史的資料の保存、②その資料を利用した歴史の調査・研究の二つです。大学文書館の設置は二〇〇五年五月ですが、これら二つの仕事はもっと以前から行なわれています。今回は北海道大学のアーカイヴズのパイオニアとも言うべき二人を紹介します。

中島九郎と五〇年史

札幌農学校開校の一八七六年から五〇年の一九二六年、北海道帝国大学は『創基五十年記念 北海道帝国大学沿革史』を刊行しました。「これがこの大学の歴史です」と北大が公式に表明した最初の通史です。執筆したのは農学部教授中島九郎（一八八六～一九五九年）です。

中島九郎は一九〇四年に札幌農学校予修科に入学しました。本科進学後に農学校が東北帝国大学農科大学へ改組したため、中島は農科大学の学生となり、佐藤昌介（農科大学長）、高岡熊雄（後に第三代総長）に師事して農業経済学を専攻します。一九一〇年の卒業後、助手となり、助教授・教授と昇進して一九四八年の退職まで務めます。

『北海道帝国大学沿革史』は、札幌農学校以来の公文書を駆使し、五〇年にわたる北大の歴史を実証的に記述しています。その後、北大では八〇年史、一〇〇年史、一二五年史を編纂・刊行しますが、その先駆となり模範となった仕事です。また、中島は一九五六年に北大の育ての親である佐藤昌介の伝記も刊行します。中島は農業経済学者としても多くの仕事を残しましたが、同時に北海道大学史の最初の専門家でもありました。

柴田定吉と「札幌農学校簿書」

そして、中島が『北海道帝国大学沿革史』執筆に利用した札幌農学校の公文書（現在は「札幌農学校簿書」と呼んでいます）の整理・保存に当たったのが、附属図書館司書の柴田定吉（一八八八～一九六三年）です。

萩伏村（現浦河町）出身の柴田定吉は地元の高等小学校を卒業後、一四歳から札幌農学校図書館に勤めます。その傍ら私立北海英語学校（現北海高校）の夜学部などで、英語・ドイツ語・フランス語・漢文等、大学図書館の司書の仕事に必要な知識を学びます。初めは定員外職員の立場でしたが、一九一三年に正式な大学事務員となり、一九二六年には附属図書館の現場責任者に当たる「司書官」となります。その後、一九五二年の退職まで五〇年間にわたって図書館の専門の仕事を続けます。

柴田定吉（1940年ころ）

一九二六年四月二六日付け『小樽新聞』は、柴田定吉とその背丈以上に積み上がった「札幌農学校簿書」の写真を掲げ、「写真は今回北大沿革史編纂に当って最も重要なる材料を提供した史料の山である」、「図書館では今度のお祝には之等全部を整理して展覧に供する由にて大学の今日あるを知らんとする人には必ず見落してはならぬ貴重な見物である」と報じています。「札幌農学校簿書」は整理の後、附属図書館が保存しました。

五〇年後、そして一〇〇年後

二人の仕事から五〇年後、『北大百年史』編纂に当たっては、「札幌農学校簿書」をフル活用し、資料集として『札幌農学校史料』二巻を刊行しました。現在、「札幌農学校簿書」は大学文書館が引き継いで所蔵しています。最も利用の多い資料です。

歴史的資料は、利用されることによってその価値が広く認識され、大切に保存されるようになり、さらにまたより広く利用されるようになります。こうした資料の利用・保存の好循環の舞台回しがアーカイヴズの役割です。中島と柴田の仕事はそのことをよく示しています。

二人の仕事から一〇〇年、二〇二六年に北海道大学は創基一五〇年を迎えます。この四月から大学文書館内に「北海道大学百五十年史編集室」が立ち上がります。二人の仕事に連なる一五〇年史の編纂が目標です。

◇関者をして感慨深からしめる
北大沿革史の史料展覽

『小樽新聞』（1926年4月26日）